



平成23年1月24日

卓話 『「小谷元彦展：幽体の知覚」紹介』

森美術館キュレーター

荒木 夏実 様

皆さまこんにちは。私は1992年から1年間、三鷹ロータリー・クラブの奨学生としてイギリスのレスター大学で勉強させていただきました。ミュージアムスタディーズという修士のコースで非常に学ぶところが多く、ミュージアムの哲学をしっかりと叩きこまれてまいりました。

小谷元彦さんは今38歳、東京芸術大学の彫刻専攻出身で、非常に若いころから活躍しております。彫刻、写真、映像など多様なメディアを使い、また現代的な感覚と技術に裏打ちされた伝統的な技法を併せ持つ作家です。今回の展覧会の「幽体の知覚」というテーマは小谷さんの作品にずっとある、そこにある見えないもの、形のないものを感じ取ってその姿を彫刻することがテーマになっています。彫刻というと非常に物質的なものというイメージですけれども、そうではなくてその裏側にあるもの、影とか気配とか不在によって感じることのできるようなものを形にすることで、この世とあの世、生と死の境界を探る試みがなされています。

ファントムリムという作品は5点組の写真で、今回の展覧会および小谷さん自身を最も象徴する作品です。ファントムリムは幻映視、幻視と訳され、手足の一部を失った後、まだその感覚を感じるような現象を言う医学用語です。作品の中で少女の手のひらが赤く染まっていて、そこにはラズベリーのような果実が握られています。食べ物をぐちゃぐちゃ触ったりすることって私たち子供の時は誰しもやっていて、その感覚は気持ち良くて楽しいものだったと思うんですね。その感覚が大人になるに従って正反対の感覚に変わっていく。小谷さんは

その感覚が変容していくダイナミズムに着目して、ファントムリムのように私たちの体のどこかにそういう快感が残っているのではないかと考え、その感覚を思い出させるような装置として作品を作っています。

もう一つのテーマが拘束とか強制。なにかを縛る、そこからにじみ出る欲望とか痛みみたいなものもよく作品に出てきます。例えばユリの花を樹脂で象ったものが、天井から吊られていて、花弁の部分に拘束具が付いて花弁が無理やり開かされている。これもユリの花という純粋で美しい、かわいらしい、無垢なイメージと拘束具という残酷なイメージが重ねあわされているわけです。

是非皆さんに体験していただきたいのが、今回の目玉の一つでインフェルノという巨大な装置です。インフェルノというのはダンテの神曲の地獄編。地獄のことを言うわけですが、8面のスクリーンに滝のイメージが映されていて上下が鏡張りになっている。永久に滝のイメージが続くその真っ只中に自分が立つという装置です。奈落の底に落ちて行く、あるいは高く天に上昇して行くような感覚を体感する装置です。ほかにも「伝統と革新」「不可視の物、影、存在の様々な可能性」「生と死」などのテーマで様々な作品が展示されています。

ありがとうございました。

